

仏典再読、苦しみと向き合う

仏教やキリスト教の教えは、自殺についてどう説いているのか。自らのいのちを絶つ人が毎年3万人を超える異常事態のなか、宗教界や研究者の間で今、教義の原点を見つめ直す動きがある。「死にたい」と口にする人や自死遺族に向き合う際の足がかりになるに違いない。

(磯村健太郎)

自殺と宗教

仏教

仏教界は、自殺問題への対応の遅れが指摘されている。理由の一つに、教義をめぐる迷いがある。「不殺生」は自分のいのちを絶つことも戒めているのではないか。一方、他者のために身をなげうつことをたたえる教えは自殺の容認では、と戸惑う。

「釈尊は判断せず」

浄土真宗本願寺派の教学伝道研究センター(京都市)は原始仏典と大乘仏典にさかのぼり、自殺に

自死者を追悼する法要。僧侶たちは遺族を包み込むように立っている(画像の一部が加工されています) 2009年12月、東京都内、「自殺対策に取り組み僧侶の会」提供



関する数百カ所を分析。その結果、釈尊は自殺について価値判断をしていないと判断した。昨年から「宗報」などで発表している内容によると――。例えば「雑阿含経」にヴァツカリという弟子の話がある。重い病の苦しみから死を考える彼を、ほ

是非論超え、遺族らの再生支援

かの弟子たちは献身的に介護する。釈尊はどうか仏法を学んでいたかを問うのみ。結局、ヴァツカリは自殺するが、釈尊は弟子たちの前で「亡くなり方」そのものについて非難していない。

僧団(出家者の集団)の運営規則に関する「律」の文献では、そもそも亡くなった人は罰則の対象外。かといって自殺を容認しているわけではない。死を考えている弟子に対応する場面などには「生きていてほしい」との強い願いが込められているという。

センターは2年前、自派の寺院を対象にアンケートをした。自殺は仏教の教えに反していると思うか、との問いに「思う」「やや思う」と答えた僧侶は計74%。しかし不殺生の教えばかりが念頭にあり、相談者の「死にたいほどのつらさ」を丸ごと受け止めるのが難しい。

自死遺族からの相談は「往生できたか」が54%、「仏教では悪と考えるのか」が27%(複数回答)。もし、僧侶が教えに反するとして「いのちの大切さ」を説けば、遺族はいたたまれない。

誤解に基づいた対応が続いてはいけないと考え、センターは仏典を読み直した経緯がある。藤丸智雄常任研究員は「釈尊の時代には、正面から自殺の問題に向き合っていた。是非論ではなく、当事者の苦しみを受け入れていくことがテーマにされていたのがわかる」と話す。

東京大学の下田正弘教授(インド哲学)も「仏教は本来、死の差別化はしない。孤独のなかに立ち続けることの尊さは説くが、結果の是非は論じない」と語る。さらに釈尊の伝記には、歴史的事実とともに仏教的価値観が表れていると指摘。伝えようとするのは「社会的な死」や「精神的な死」などさまざまな形での「死を経ての再生」というモチーフだという。

「死は終わりではない。自死遺族にとつてのメッセージは、自らの再生の可能性が開かれていることにある。身近な方の死の意味を受け取り、亡き人とともに新たな生を始めることができるのではないだろうか」

要因こそ問題に

往復書簡での相談や自死者の法要をしている超宗派の「自殺対策に取り組む僧侶の会」(事務局・東京)は2007年の設立以来、自殺そのものを「悪」とするのは誤り、との考えを共有してきた。現場での経験を通じ、問題にすべきは自殺を生み出す「要因」であり、引き起こされる「結果」ではないと確信した。

藤澤克己代表は「相談者に対して不殺生の教えから『死んではいけない』と否定してしまうのと、『死んではいけない』と寄り添うのは似て非なるものだ。仏典からの問い直しは、相談の現場で大事にしてきた方向性を教学的に裏付けてくれる」と評価する。

この連載は全2回です。次回(キリスト教)は10日に掲載予定です。

「罪」の解釈問い直す

自殺と宗教

キリスト教

キリスト教は「いのちには神に与えられたもの」という大前提から、自殺を「罪」としてきた。しかし、それにも疑問の声が上がっている。

関西学院大学神学部教授で、NCC(日本キリスト教協議会)宗教研究所の研究員、土井健司氏は、昨秋の日本生命倫理学会で2人の重要な神学者の論者を再検討した。



②「自殺は殺人」とまで訴えることで「死ぬ必要はない」と慰めようとするのが本意——などと指摘した。

さらにトマス・アクィナス(13世紀)の『神学大全』に言及。神との関係を重んじて「自殺してはならない」と述べている点は、「死ななくても神に忠実に生きる

ことができる」ととりえ直す見方を論じた。

土井氏は「どちらも、むしろ自殺防止に努めていることがわかる。そもそも聖書に自殺の是非をめぐる議論はない。聖書解釈の歴史のなかで、自殺の『罪』にアクセントが置かれすぎた」と話す。

差別助長を反省

これとは別に、日本カトリック司教団は2001年、公式メッセージで次のように謝罪している。「教会は『いのちを自ら断つことはいのちの主である神に対する大罪である』という立場から、これまで自殺者に対して、冷たく、裁き手として振る舞い、差別を助長してきました。今その事実を認め、わたしたちは深く反省します」

カトリックは以前の教会法で、21世紀を迎えるの公式メッセージ「いのちへのまなざし」を発表する日本カトリック司教団。死刑や安楽死などともに自殺の問題も取り上げた。01年、東京都内

人の弱さ包む優しさ伝える

現実的な姿勢 心強い

自殺対策に取り組むNPO「ライフリンク」代表で、内閣府参与の清水康之さんの話。社会問題となっているのは、本当は生きたいのに追い詰められた結果としての自殺だ。それを「悪」や「罪」としか語れない思想は貧弱。どれほど多くの遺族らが傷つけられただろう。仏教もキリスト教も取り返しのつかないことをしてきた。信頼回復は簡単ではないが、原点に返り、現実的な姿勢を取り始めたのは心強い。弱い立場の人間に寄り添い、「声なき声」に耳を傾ける。宗教界がそうした本来の役割を果たすため、どう踏み出していくのか見つめたい。

自殺した人に対するミサや埋葬などの禁止を定めていた。83年制定の新教会法ではほとんどの規定が削られたものの、「罪」と見なす基本的な立場は変わらない。公式メッセージのとりまとめ役の一人だった森一弘司教は、従来のパチカンのあり方への「挑戦」だったと明かす。「『自殺は罪』と振りかざしても、追いつめられた人の心には響かない。教義中心の発想はもうたくさん、この思いがあった」

教義修正はせず

聖人とされるトマス・アクィナスは、神学とアリストテレスの哲学を融合させ、自殺に関する論理をつくり上げた。その教義をくつがえすのは、司教団にとって難しい。そこで考えたのが、人の心に訴える「メッセージ」という形式だった。弱く、矛盾を抱える人間

へのまなざしを重視する姿勢を示した。

メッセージは、苦しみの闇のなかには二つの罪があると述べる。「簡単に開けられる、絶望の世界に導く罪」と「開けるのは難しいけれども、希望の世界に導く罪」。どんなに重くても、後者を開けることをあきらめてはならないと呼びかけている。

一方、遺族には「神は正義の神であると同時にあわれみの神でもあります」と語りかけ、すべてを神にゆだねるよう勧める。森司教は「2千年の間に、よけいな教義が生まれてしまった。おそろしさを強調するのは歴史の産物。そうではなく、神の優しさが人間の弱さを包み込むことを伝えていきたい」と語る。(磯村健太郎)

前回の「仏教」は6日に掲載しました。